

琉球大学学術リポジトリ

琉球列島における魚類の生息場所としての海草藻場の役割

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀プログラム 公開日: 2007-07-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 洋平, 土屋, 誠, Tsuchiya, Makoto メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/832

PE-2 琉球列島における魚類の生息場所としての海草藻場の役割

中村洋平・土屋 誠

琉球大学大学院理工学研究科

海草類は海中に生息する被子植物で、熱帯から亜寒帯の沿岸浅海域に海草藻場（以下、藻場）と呼ばれる独特の群落を形成している。このような藻場は、魚類の採餌場や成育場として重要な役割を持つとされているが、サンゴ礁海域におけるその実態については、まだよくわかっていない部分が多い。亜熱帯域を縦断するように長く連なる琉球列島では、地域によって熱帯性海草の分布様式に違いが認められる。例えば、熱帯性が強いとされる海草の一種のウミシヨウブは南部の八重山地方でしか群落を形成しない。一方、熱帯性海草の分布の北限にあたる奄美地方では沖縄地方や八重山地方にみられるような大規模に発達した藻場はない。このように地域によって藻場の様相が大きく異なる琉球列島では、魚類の生息場所としての藻場の役割も地域によって異なる可能性が考えられる。そこで、本研究では、奄美地方と沖縄地方と八重山地方における藻場の魚類相および魚類の藻場利用パターンの類似点と相違点を明らかにすることを目的とした。

調査は2004年11月～12月、2005年5月～6月、8月～9月、11月～12月に、奄美大島の赤木名と赤尾木、沖縄本島の備瀬と恩納、および八重山諸島石垣島浦底と西表島網取で行った。各調査地のサンゴ域（造礁サンゴが繁茂している場所）と藻場に、1×20mのトランセクトをそれぞれ7本ずつ設置し、各トランセクト内に出現した各魚種の個体数と体長をSCUBA潜水による目視観察で記録した。

調査を通して、藻場で合計23科62種の魚類が確認された。各藻場で観察された総種数は、どの調査地においても30種程度と大きな差は認められなかったものの、個体数には地域による差が認められ、奄美地方は沖縄地方や八重山地方に比べて明瞭に少なかった。クラスター解析によって各調査地の藻場に出現した魚類群集を分類したところ、魚類群集は、季節の違いよりも地域の違い（奄美地方グループ、沖縄地方グループ、八重山地方グループ）によって大別された。どの藻場の魚類群集も、藻場のみで生活する専棲魚と、藻場を採餌場や成育場として利用するサンゴ域の魚類によって構成されていたが、その魚類相には地域による違いが認められた。藻場専棲魚についてみると、チビブダイやオオヒレテンスモドキは3地域で確認されたが、フチドリカワハギは八重山地方にしか出現しなかった。藻場を稚魚の成育場として利用するフエフキダイ類では、八重山地方ではイソフエフキが、奄美地方ではイトフエフキが、そして、沖縄地方では両種が出現するなど地域によって出現種に違いが認められた。また、サンゴ域に生息する魚類の中で藻場にも出現する魚種の割合を調べてみると、どの地域でもサンゴ域魚類全体の約10%を占めていた。発表では、地域による出現魚種の違いの要因についても論じる予定。